

安倍元首相の遭難

廣瀬 誠 陸自73

参議院議員選挙の応援のため、奈良で応援演説中であつた安倍元首相

が暴漢に改造銃で撃たれて亡くなつた。日本国民にとつて衝撃的な事件である。日が経つにつれて、失つたものの大きさを今更ながら国民は感じ始めているのではないか。以下は、一連の報道を見ながら、頭に浮かんだことである。

まず、改めて安倍元首相に対する国民の支持の高さが、実際に目に見える形でうかがえたことである。遭難現場や山口にある事務所そして葬儀場の献花台には、たくさんの花が手向けられた。その中には10代と思われる若い人の姿も多くあつたという。特に増上寺の葬儀場では、式場に入りきらない多くの人々が道路上に溢れ、献花が中止になるほどであつた。専制国家等では強制的な大量動員は見慣れた光景だが、この日本で自主的に集まつたこれほど多くの国民に見送られていく映像は、国民の多くが安倍氏とその政治をどのよう

に受け止めていたかを雄弁に物語る。多くの外国の首脳等から弔意が示されたとの報道も印象深い。従来から安倍氏の首脳外交は高く評価されてきたのだから、外交は国民には見えにくく判りづらい。今回、私

形で示された。麻生太郎氏の弔辞の中にも、次のような一節があつたという。

「あなたが総理を退任された後も、ことあるごとに「安倍は何といつている」と、各国首脳が漏らしたことには私は日本人として誇らしい気持ちをもつたものであります。」

外国の首脳等から、世界情勢をいかに見るかというような戦略的な助言を求められるような首相を、私たちは長い間持たなかつたように思う。このことも、わが国がいかに大きなものを失つたかを示している。

そして、首相在任間におけるマスコミの報道ぶりと同回の各国の反応とのギャップは、国民にとつて強い印象を残したのではなからうか。それは、日本国民の関心事と国家の大事が一致していないことを示しているであろう。国際的な国家間の関係に関わることと国内政治の課題との間で、私達国民の関心事は適切なバランスを取っていたであらうかという反省とともに深い悔恨を禁じ得ない。

安倍氏の功績は多い。安全保障に限れば、まず、わが国の安全保障体制を抜本的に変えたことが挙げられよう。国家安全保障局の創設の画期

的意味について、歴史学者であり戦略に関する著書もあるルトワツクは、産経新聞7月15日付けのコラムにおいて、日米関係の調整において「日本側は省庁間で連携しなかった」とし、これを克服するための国家安全保障局の設立を次のように高く評価している。

「安倍氏の下では、外交官と自衛隊関係者が意見を交わし、日本が自らの手で外交・安保政策を作り上げる体制ができた。：国家安全保障局の設立は、安倍氏の指導力なしでは実現し得なかった、外交・安保分野での最大の遺産といえる。安倍氏は、関係省庁の権限を国家安全保障局に集約させ、日本の政策決定過程を変え、政治構造を変えた。：」

国家安全保障局の創設とともに、わが国としてはじめて総合的な「国家安全保障戦略」を策定し、「積極的平和主義」を打ち出したことも特筆すべきことであろう。次に、平和安全法制の整備が挙げられる。勿論この法律に対し多くの批判もあるが、わが国の防衛にとって画期的なことであった。その批判の一つとして集団的自衛権の行使が憲法違反との論があるが、その憲法改正では、安倍

氏は、自衛隊加憲論を提案した。すなわち、憲法9条はそのままにして、自衛隊を明記するというものである。これは、わが国の防衛のために自衛隊を軍隊とすることまでは踏み込めなかったということだ。これについては、安倍氏は思想家でも法律家でもない、正に政治家としての判断だったのだろう。それでも、国防に関心を有する一人として、そこに安倍氏の限界があったことも感じるのである。

最後に、明治のわが国憲政史上、首相あるいは首相経験者が遭難・暗殺にあつた例は少なくない。伊藤博文、原敬、浜口雄幸、犬養毅等がすぐに思い浮かぶ。ここに挙げた例では、その背景、原因は政治的なものである。今回の事案の背景・原因の解明にはまだまだ時間を要するであろうが、今まで報道されているところによれば、個人的な要因のように報道されている（それは、表題で「暗殺」ではなく「遭難」という言葉を使用した訳でもある）。いかなる理由があるにせよ、今回のような事件が許されないことは自明である。その上で、私達国民の安全と繁栄そしてその生活を支える国家を率いるリーダーをこのような形で排除しよ

うとするような事件が個人の利害や愛憎のために引き起こされたということは、今を生きる私達日本人の「公（あるいは国家）」に対する意識の稀薄さを象徴しているようにも思える。

国民の多くは、安倍氏を失つて今更ながらその喪失感の大きさに戸惑っているように見える。それだけ、安倍氏がわが国に残したものと氏の存在自体が、洵に大きなものであつたということだろう。この喪失感は、これからも日本を導く強いリーダーを私たちは持つことができるのだろうかという不安につながっている。このことは、今こそ、どのような国を私達は望んでいるのか、国民ひとりひとりが考えを深め、わが国が長く抱えたままにしてきた課題について真剣に議論し、そして「結論」を出す覚悟が求められているということではあるまいか。

と